Osaka University Knowledge Archive

Title	禁欲の芸術家 : カフカ『或る犬の探求』論
Author(s)	石光, 輝子
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1978, 12, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48127
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

禁欲の芸術家

―カフカ『或る犬の探求』論―

石光輝子

カフカは一九二〇年ある断篇にこう記している。

「禁欲者の多くは飽くことなき者である。彼等は生のあらゆる領域でハンストをし、それによって、同時に次のようなことに達しようと望んでいる。

一、一つの声が言う。もう充分だ。お前は充分に断食をした。もう他の者と同じように食べてもよい。それは食事とはみなされないだろう。

二、同じ声が同時に言う。お前はもう長い間、自分を抑えて断食してきた。今からお前は喜びをもって断食するだろう。それは食物よりも美味であろう（だが同時に又お前は現実には食べもするであろう）。

三、同じ声が同時に言う。お前は世界を征服した。私はお前を食べることと、断食することから解放してやろう（だが同時にお前は断食もし食べもするであろう）。

それに加えて、もう一つの先程から絶え間なく語りかけてくる声が聞こえる。お前は成程完全には断食しなかったが、その志はちゃんと持っている。それで充分だ。」(1)

禁欲者はこれらの声を生命の綱としなければならない。さもなければ禁欲を究めようとする余り、命がついえてしまうからだ。享楽者である人間も多勢いるが、いくらかにせよ禁欲者である人間も多い。カフカも又後者の人間だったが、彼は自分が大抵の人間と同様禁欲を完全に成就しないことに、いつも負い目を感じていたのではないだろうか。カフカは、完全に断食をして生命を投げうってしまった禁欲者の姿を『断食芸人』(Ein Hungerkünstler)の中に描いた。一方、断食に挫折して、しかしこれからなお断食の試練に耐える覚悟を持っている禁欲者の姿を、我々は『断食芸人』と同じ一九二二年に著わされた『或る犬の探究』(Forschungen eines Hundes)の中に見ることができる。

断食芸人は又、芸術家(Künstler)を見世物興行の芸人に戯画化した姿でもある。この時期カフカを捕えていた主要なモティーフの一つが、芸術家の問題だということは、生前最後に発表された作品集『断食芸人』を見ても明らかだろう。この作品集には『断食芸人』の他、『最初の悩み』(Erstes Leid)『小さな女』(Eine kleine Frau)『歌姫ヨゼフィーネ又は鼠族』(Josefine, die Sängerin, oder das Volk der Mäuse)が収められているが、『小さな女』一篇をのぞき、他三篇には先程の戯画化された芸術家の姿を見ることができる。これらの作品が執筆されたのは、いずれも一九二一年から一九二四年の間だが、カフカが死亡したのは一九二四年であった。肺結核を発病したのは一九一七年である。それ以来健康は悪化の一途を辿り続け、死を目前にした芸術家は、自分のなりわいを考えてみずにはいられなかったのであろう。カフカの文学の追求の仕方がそうであったから、芸術家と共に、禁欲者、探究者も当然のことながら重要なモティーフであって、それらはしばしば重なりあった。

本論は、『断食芸人』論の延長として、論じられることの少ない『或る犬の探究』を、芸術家と禁欲者およびそ

れに付随するいくつかのモティーフを手がかりに、論じていくものである。

一、芸術家

『或る犬の探究』は、一匹の年老いたと思われる犬の、探求に励み続けたこれまでの生活に対する回想である。この犬の探究は「大地はこの糧を何処から得るのか」という問いから出発する。それは語っている現在もなお続けられており、話者はこの探究に一層の専念を決意しているほどなのだが、この作品自体未完である故、その全貌は知り得べくもない。この奇妙な探究について論ずるのは後にして、まず彼の前に現れた、芸術家を表わしているとおぼしき三種類の犬達について考えてみよう。

話者の回想における最初の事件は、音楽家の犬達との出会いである。話者がまだ幸福な子供時代にあった時、彼は突然「まだ聞いたことのないような驚くべき騒音と共に」（二三六）現れた七匹の犬を見る。話者はこの犬達を音楽家と呼んでいるが、「彼等はしゃべらないし、歌わなかった。おおかたは頑強なまでに押し黙っていた。だが何もない空間から、魔法のように音楽を奏で出すのだった」（二三七）、というのも、ここで言う音楽とは、「全てが音楽であった。足の上げ下げ、頭のある種のめぐらしかた、駆けたり休んだりするのや、各々が互いにとる位置あるいは輪に連なったりする」（同前）ような動作等々だからである。この音楽は話者を「ぼうっとさせ、目を回らせ」（二三八）、「惑わせる」（二四〇）ような音楽である。彼がこれを音楽（Musik）とも騒音（Lärm）とも呼んでいるように、話者を混乱させへとへとにさせるこの犬達の「音楽」はネガティヴに扱われている。話者に音楽（あ

るいは芸術）のもつ快感も陶酔も与えないという点で、それはまさに騒音でしかない。しかしそれは話者の意識を奪い、混乱させ、屈服させるだけの力は持っている。彼はその「犠牲者」（二三八）であって、許しを乞わなければならない程にその力は強い。このように強力な作用を及ぼす「騒音」とは如何なる事であろうか。それには、話者のこの時の状況を見なければならない。

「当時私は長い間、闇の中を走っていた。何か大きなことのあるのを予感しながら。その予感は勿論のことやもすれば欺かれた。私はいつもそういう予感を抱いていたのだから。そうして滅茶苦茶に、何も見えず何も聞こえず、ただ定かでない欲求のおもむくままに、私は長い間、闇の中を走っていた。」（二三六）

話者はある場所で突然立ち止まる。闇の中を走ってきたのに、其処は実に明るすぎるぐらいの場所である。何かうっとりするようなにおいが立ち昇ってくる。其処へ音楽家の犬達が驚くべき騒音と共に闇の中から現れる。此処では、光と匂いと音が、つまり眼と鼻と耳の受持つ、人間（犬）の三つの主要な感覚に訴えるものが同時にあらわれる。この時まで長い間、彼はこれらの感覚を眠らされていたのだから、この時一気に全ての（と言ってよい）感覚に眼覚めたわけである。彼はこうして、何もかもぼんやりとしか感じとっていなかった子供から、感覚を持ち、思考し、研究する大人となる。話者は七匹の犬達に出会うまで、全ての感覚に対して未経験であった。音楽に対しても然りである。音楽は「既に私が乳呑児のときから、当然の欠かすことのできない生活要素として私をとりまいていたのだった」（二三六）と話者が今となっては思うにも関わらず、「皆は子供の理解力にふさわしいほのめかしの形でしか音楽のことを言おうとしなかったので、それだけ私にはあの七匹の偉大な音楽家達が不意打ちであり、まさしく

うちのめされるようなしろものだった」（二三六―七）と述べられているように、彼等の音楽が話者にとって不快であり苦痛であったのは、初めて触れたその衝撃が大き過ぎたからである。意識を失なわせ、力を失なわせるのは、確かに陶酔の前兆である。事実、話者は後にその陶酔を体験する。

この音楽家達は、その音楽で話者を錯乱させるだけでなく、とんだ恥ずべき行為で彼を怒りに誘う。すなわち後足で立って歩き、腹をさらすのである。話者にとってはこのような所業はきわめて滑稽で下品なばかりか、罪深い行為、いや罪そのものである。音楽家達は、前足をおろそうとする衝動がまるで誤りであるかのように振舞う。本性(Natur)が誤りだというのは話者には何とも不可解である。彼は子供ながら何としても彼等をいさめようとする。だがそこへ、一時消えていた音楽が再び聞こえ出して力をふるい、彼は呻きながら、音楽家達が「罪を犯し、又それを何も言わずに眺めるという罪に他の者を誘う」（二四〇）のに為すすべもなく屈する。芸術家は己れの裸を人眼にさらして生きている。そのような露出狂的行為は勿論のこと本性には反しているので、本性を保っている子供の眼にはそれが異常とうつる。そしてカフカの持っていた眼はこのような、まるで子供のような眼であった。その眼には、彼等の行為を見ていることさえ罪と写るのだった。

音楽家達のこの行動に関しては、次の三点のことが観察される。第一に彼等の行為は何か恥ずべきことである。第二にそれは自然(Natur)に反している。第三にその行為は観衆に理解されていない。同じ事を、カフカの他の作品の芸術家についても挙げることができるだろう。先に述べた『断食芸人』の主人公の芸(Kunst)は断食なのだが、それこそはまさに自然に反した行為である。突きつめれば突きつめる程、死に近づいてゆくなりわいとは、芸術を言い得て妙であるが、勿論この芸は観衆には理解されていない。人々は只、流行にのって断食芸人をもてはやして

いるだけであり、無理解な言動で、人気だけでなく人々の真の理解を求めている芸人を苦しめる。それ故ひとたび流行が去れば、芸人に眼を向ける者は一人として居なくなる。しかし皮肉なことに、その時にこそ芸人は自分の芸に打ちこめるようになるのだ。彼は、死の直前には、観衆の理解を求める心を捨て去っている。『歌姫ヨゼフィーネ又は鼠族』の主人公も同様に、喝采を受けながら真の理解のないことを嘆いている。孤高の芸術家は世間から一人離れているが、その世間に対し背をそむけるのでなく、手をさしのべ、いやそれどころか子供が父親に対するように甘えかかっている。世間＝観衆がこのように大切な存在である為に、断食芸人とヨゼフィーネにとっては彼等の理解が、自分達の芸の価値を決定するかのように重大なものとなる。

話者はこの音楽家達との出会い以来探求生活に入るが、そういうなかで耳にしたのが空中犬(Luftbunde)[2]のことである。彼の伝え聞いたところでは、その空中犬というのは、彼の頭ぐらいの大きさできわめて小さい。したがって弱々しく、未熟な体を持っている。その最も顕著な特異さは、大地から離れて空中を漂っていることである。だから犬の誇りであるその足も萎縮してしまっている。又彼等は他の普通の犬達によって養われている。彼等は自分達の哲学的思考や観察について実に饒舌で、学問に寄与しようとしているのだが、無論それは役に立たない、意味のないことである。その上、彼等が一体何処からくるのか、どうやって一族をふやしていくのか誰にもわからない。ざっとこんなことを話者は噂に聞くが、自身の眼で見たことはない。

以上挙げた空中犬の特徴に、又もやカフカの、芸術家に対する自嘲的まなざしを見ることができる。この作品の主要なモティーフである「糧」を生み出す大地に足がついておらず、従って自ら糧を得るすべを知らないので、他の、地に足がついている犬達に養われている、というのは、文学ではパンを得られないことに苦しんだカフカの皮

肉である。又、彼等の空中に漂う生活から、我々は『最初の悩み』の空中ブランコの曲芸師(Künstler)を思い出す。この曲芸師は芸を磨きあげる為に日常生活も空中ブランコの上でおくっている。彼もやはり普通人の生活をおくることができず、人々から一人離れて空中高く孤高の生活をおくっている。生きていくのには勿論他の人々の手を借りねばならない。空中犬にも、未熟な、という表現がされていたが、ヨゼフィーネも空中ブランコ曲芸師も子供っぽく、人々から幼児の如く保護され、世話されている。それは芸術家の、世間に対して甘えた、寄生的生活態度であろう。そして勿論、空中を漂うのは自然に反した生活である。音楽家の犬は前足を大地から離していたが、空中犬は前足ばかりか後足までも大地から離れているのである。又、空中犬の出生がわからないというところに、彼等に対し世間が感じとるうさんくささが見られる。

物語の最後で話者が出会うのは猟犬(Jäger)である。この猟犬＝狩る者を芸術家に擬することができるかどうかは、前二者ほど定かでない。それは音楽をもたらす者ではあるが、弱々しくもないし自然に反した恥ずべきことをしているわけでもない。むしろ猟犬の取り扱われ方は非常に好意的で、前二者の全てにネガティヴな描かれ方と対照的である。それというのも、猟犬には探究者としての姿が表面に押し出されているからである。猟犬と話者は語る。

「『私は狩らねばならないのだ。』『私は立ち去らなければならない。君は狩らねばならない。……しなければならないばかりだ。どうして僕達がしなければならないのか、わかるかい？』『いや』と彼は言った。『だが何もわかる必要はない。それはわかりきった当然のことなのだから。』」（二七五）

話者が猟犬にその行為の意味を執拗に問い質すのは、自分の行為への意味づけができないからである。断食という形での話者の探究は自ら選んだものであったが、飢えの苦しみの中で、その探究の目的、断食という行為の意味が話者にはわからなくなる。というのも、食を断つという、動物にとって最も苦しい禁欲行為をささげているのに、話者には何も与えられないからだ。猟犬にはこのような迷いはない。猟犬は狩りという形での自らの探究を当然なこと、わかりきったことと受けとめている。だが猟犬にとっても狩りは「せねばならぬ」行為であり、決して安逸なものではない。彼は自分の感情を抑えて、自らの使命――狩ること、追いはらうことに専念する。だがこの探究者は禁欲的なばかりではない。彼は、そのまなざしも姿も力強く美しくて、話者に好意をこめて近づこうとし、「僕が気にいらない？」（二七四）と尋ねる。この猟犬は美であり、誘惑であり（事実、話者を断食の中断へと誘惑する）、異性に対するが如き態度で話者に向かってくるという点で、断食芸人を断食最終日に迎えに来る女性と共通するものがある。カフカにとって結婚は、文学活動における障碍以外の何物でもなかったから、女性は犠牲にされるべき者としてや、誘惑者として表現された。猟犬は女性ではないが、話者にとっては女性と同様に魅惑的存在である。[3] さらに猟犬はその歌で話者を屈服させ、同時にまた話者に力を与えるのだが、歌については後述する。

猟犬のうちに我々は、探究する者としての芸術家の姿を見た。もとより芸術家とは、各々の芸術を達成するべく絶え間のない探究を強いられるものであろう。カフカその人が、死力を尽くした探求者だったのである。それでは話者自身はどうであろうか。話者こそは題名にもみるとおり探究者である。我々は以上のように話者の前に出現した芸術家達について考察したが、次に、話者自身について、話者の研究についてみていきたい。

二、糧

話者の研究は、まず「犬は何を糧としているのか」という問いを考えることから始められる。この問いは、話者の述べるところによると、原始時代からある問いで犬達の思考の主な対象であり、この領域に関する観察、試論、見解は数限りもないのである。次に話者は、「大地はこの糧(Nahrung)を何処から得るのか」という問いを考え始める。話者がこのように、糧あるいは食物について研究するのは、「犬の本質に迫るには、糧についての研究が最も適切で、直接目的へ導いてくれるように思えた」（二七七）からである。カフカがこの作品を犬の世界に設定した理由の一つも其処にある。食は人間にあっても最も基本的で必要不可欠な行為だが、動物――犬にあっては、その比重は更に大きい。動物にとって生きることは食することである。「何を糧としているのか」という問いが原始からあり、皆の思考をしめているのも当然と言える。つまり動物を素材にした場合は、状況を単純化できるのである。無論カフカが好んで作品に動物をとりあげるのはそれだけではない。この作品に採用された犬という動物に関してみても、『訴訟』(Der Prozeß)のヨーゼフ・Kは石切場で処刑されるとき、「まるで犬だ！」[4]とつぶやくのである。また『城』(Das Schloß) の奇妙な助手達は「犬のようにみだら」[5]なのである。犬（あるいはその他の動物の場合も同じと考えてよい）には明らかにネガティヴな意味がこめられている。それは芸術家を芸人にしたてる場合も同様であろう。

だが、人間でありながら檻の中に住んで動物のような生活をおくり、しかも人気の点で動物に劣るという、動物以下の状況におちこんでいる断食芸人の場合はどうであろうか。その対比として出されているのは若い豹である。

この荒々しい動物には、観衆には堪え難い程の、まぶしいばかりの生の喜びが溢れている。断食芸人が衰弱した生であり、限りなく死へ近づいていく者であり、埃と汚穢にまみれた者であるのに比べ、豹は檻の中の囚われの身であることを、見ている者に忘れさせる程の生命力をはなつ、のびやかな美である。このように両者は全くの対立物なのだが、その対比は動物の次元で行なわれている。したがって、動物が必ずしも常にネガティヴな意味をもつわけでない、と言えるだろう。

扨、主人公の犬は、自分達を養う糧が一体何処から来るのか、ということを考えてみるに、学問に記してあるのとは異って、それは主に上から来るのだということを悟るにいたった。彼は学問の誤謬を正すべく、いろいろな実験をして彼の見解の正しさを証明しようとするのだが成功せず、最後の手段として次のような実験を思いつく。すなわち、糧から自分の身を退けてみて、糧は（大地をめがけてではなく）自分をめがけて来ることを証明しようとするのである。彼は、糧は天から与えられるのだと、仮に自分達が求める努力をしなかったとしてもそれは自分達に恵まれるのだと、半ば願望し、半ば信じていたわけである。話者はこうして断食にはいることとなる。

食は人間の、そしてまた動物の最も基本的な営みであり、生命の維持には不可欠の行為である。文学を反生命的所業として捕えていたカフカは、しばしば食することと書くことを比較している。

「私のうちには書くことへの集中がはっきりと認められる。書くことが私の本質にとっては最も実り豊かな方向だということが、私の構造のうちで明らかになってしまうと、全てが其処へ押し寄せ、あらゆる能力をからっぽにしたのだ。性の、食べることの、飲むことの、哲学的思考の、そしてとりわけ音楽の喜びに向かう能力を。私はこういった全ての方向でやせ衰えてしまった。[6]」

食べることの快楽は、書くことによって日常生活から排除されるあらゆる地上的快楽を代表している。断食とは「生のあらゆる領域におけるハンスト」であった。つまり食する快楽への断念、食欲の放棄であると同時に、あらゆる地上的快楽に対する禁欲、そして探究――書くことへの専念を意味していた。カフカは生命力に乏しい人であった。自身食欲の衰えに悩み、胃のために食を絶ったこともある。或る日、カフカはそういうことをよく知っているマックス・ブロートに宛てて次のように書いている。

「君は、完全への志向が女性への到達を僕に妨げているのなら、同様に他の全てのものを、つまり食べることとか、事務の仕事等々を、僕に不可能にしているに違いないと言っている。

それは正しい。……この不可能性は実際存在する。食べること等々の不可能性がね。ただそれが結婚の不可能性ほどひどくは目立たないだけなのだ。」(7)

この手紙では女性（結婚）と食することが並べて考えられている。結婚は、カフカが作家――芸術家としての生活と、市民的生活とを両立させうるかどうかのきわめて重要なポイントであった。彼は三度婚約して三度破棄している。彼は結局書くことの為に結婚という生の喜びを断念した。あるいはそれに近づけなかった、と言った方が良いかもしれない。以下食べることに代表されるあらゆる人間的快楽に対しても同様であった。ただカフカが自分で言っているように、彼の生活で最もめだつのが結婚への禁欲だったということである。

断食をした若い頃から最早ずい分時が経っている今、話者はこう語る。

「今でも断食が、私の探究には最後の最も強力な手段だと私は思っている。断食によって道は通じる。至高のものには、もしそれが到達できるものならば、至高の業績だけが到達できるのだ。至高の業績とは、我々にあっては自由意志による断食のことなのだ。」（二七〇）

カフカ作品の主人公は常に至高のもの(das Höchste)を求めてきた。『城』のKも『掟の前で』(Vor dem Gesetz)の田舎から来た男も『訴訟』のヨーゼフ・Kも、それぞれに、城、掟、裁判所という名の至高のものを求めていたのである。それぞれがそれぞれの手段を尽して探究をし、至高のものに到達しようと望んでいた。ここで注目すべきなのは、禁欲それ自体を業績とする考え方である。至高のものに到達するには多大の犠牲を払わねばならないのは当然だが、犠牲を捧げさえすれば求めるものが得られるだろうという考え方はある意味では幼児的である。断食芸人やヨゼフィーネが幼児的なのは決して偶然ではない。求めるものに具体的に近づいてゆかない禁欲それのみでは、求めるものを得られないことは明らかであろう。禁欲をし犠牲をはらっていることを認めてもらい、求めるものを与えてもらわねばならないのである。カフカの頭上には、沈黙し全く答えてくれないにせよ、常にある種の絶対者がいたのである。禁欲者達は不安だったから、自分の業績に対して人々の承認をも必要とした。探究する犬は「私は皆を私の仕事の証人にしようとした。皆が証人になってくれることは、私には私の仕事以上に大切ですらあった」（二六二）と語る。断食芸人はだから観衆に媚を売り、観衆の賞讃を必要としたのである。しかし最後には、話者も断食芸人も世間に証人になってもらうことを放棄し、孤独の中で頭上にむかってのみ犠牲を捧げるにいたる。話者が断食という手段を講じるさいに期待していたのは、「糧が上からおりてきて、大地のほうは気にかけ

ず、入れてもらおうとして私の歯をとんとんとたたく」（二六七）ことだった。この場合犠牲は断食（禁欲）であり、その志は持っていると素晴しい業績をあげたと、認めてもらえたしるしが糧である。

ところで話者の実験はどういう結果になっただろうか。彼は当然のことながら、飢えの大変な苦しみを味わうのだが、その中で彼は、断食に関する掟(Gesetz)の中の対話の正しい解釈を悟るに到る。その対話の内容は次のようなものである。

「我々の賢者のうちの一人が、断食を禁ずるという意図を表明した。そうすると他の一人の賢者がそれをいさめて、『いったい、いつか断食しようとする者がいるだろうか?』と問うた。そこで第一の賢者はもっともだと思い、禁止をさし控えた。」（二七一）

掟の中のこの対話に関して、多くの解釈者は、断食は結局禁じられておらず自由であるという解釈をしている。しかし話者の悟ったこの対話の真意はこうである。

「第一の賢者は断食を禁じようとした。賢者が望むほどのことは起きたも同然なのだ。だから断食は禁じられていたのだ。第二の賢者は彼に賛成したばかりではなく、断食を不可能だとすらした。そこで第一の禁止に第二の禁止、つまり犬の本性自体による禁止が重なった。第一の賢者はこれを悟って明確な禁止をさし控えた。すなわち彼はこういったことを全て説明することによって犬達に、分別を働かせ自分自身に断食を禁ずることを命じたのだ。」（同前）

断食が動物の、人間の本性に反しているのは明らかなことだ。それは生の衰弱と死をもたらす行為だからである。かつて話者は、音楽家の犬達の恥ずべき行為を本性に反しているとして非難したが、ここで彼も同様の誤ちを犯すにいたった。それは、音楽家と話者が芸術家――探究者として同類となったからである。

そこでこういう認識を得た結果、彼は理性に従って挫折感を持たず断食をやめることもできた。しかし彼は苦痛の中に、断食を続ける「誘惑」（二七二）を感じ、それに「みだらに」（同前）従っていく（我々は此処で禁欲の苦痛がある種の快楽に変じていることに気づく）。だが実際、話者には断食をやめて皆の所へ戻るだけの力もなかったのである。彼は激しい孤独感におそわれる。世間から離れ、孤独の中で禁欲に励んだのは何故だったのか。

「この、真理を聞かせてくれる者は誰もいない虚偽の世界から真理に達する為だった。生まれながらにして虚偽の市民である私も真理を語ることはできない。ひょっとすると真理はそれ程遠くではなかったのかもしれない。だから私も、私が思っていた程孤独ではなかったのかもしれない。皆に見捨てられていなかったのかもしれない。ただ自分に見捨てられていたのだ。失敗して、死んでいくこの私に。」（二七三）

事実話者は見捨てられていなかった。「地の下にいる者も、地の上にいる者も、天にいる者も、誰も私のことなどかまっていなかった」（同前）ように思えたが、猟犬が彼のもとへ来て、彼に皆のもとへ、つまり食物のあるところへ帰るだけの力を与える。話者が最初に期待していた、上からおりてきて自然に口にはいる糧は与えられなかったが、少なくとも彼は、その志はあることを認められたわけだ。彼にそれだけの力を与えたのは猟犬の「歌」である。

話者は飢えに弱りきっていたにもかかわらず、猟犬の歌に駆りたてられて(jagen) 友人達のもとへ、すなわち、食物のあるところへ、普通人の日常生活へと走り帰る。糧に導く音楽というのは、『変身』(Die Verwandlung) にも登場している。グレゴールは人間から虫に変わって以来、食べ物の好みも変わってしまい、何も食べられなくなる。人の食べるものを見て、「僕には食欲があるさ……だけどこんなものにじゃない」[8]と思うのだが、或る日妹の弾くバイオリンを聞いているうちに感動に襲われる。

「音楽にこのように感動するというのに、彼は動物なのだろうか? 彼には、焦がれている未知の糧への道が明らかになるかのような気がした。」[9]

食欲を起こさせてくれる食物がみあたらない、つまり口にあう食物がない、というのは断食芸人も持っていた悩みだった。彼等は、自分達の欲求を満足させてくれるものを見つけることができないのである。その見あたらぬものに飢えて(hungern)苦しむのである。憧れの未知の糧とは、どうしても満たされない欲求とかつえを癒し、鎮めてくれるものとしての救済であろう。そしてこの救済はこの世にあるかどうか疑わしい。断食芸人もグレゴールも飢えたままで、飢えの為に死んでいくからである。一方、食事は『変身』において一種の、人間関係をあらわす軸となっている。グレゴールは自分が何を食べたいのかもわからずに、食堂へ何とかして入りたいと思う。食堂の座卓は明らかに家族団欒の象徴である。彼は家族に見捨てられることを怖れているのだ。食欲がないにも関わらず食物に執着しだしたのは、家族に省みられなくなってからである。食物への執着は、家族への執着を意味する。また、その食堂の座卓を家族が下宿人達に明け渡し、彼等に食事を奉仕し、自分達は台所に追いやられて食事するというとこ

ろに、下宿人とグレゴールの家族の力関係が如実に出ている（この力関係は、家族の弱味であるグレゴールが死ぬことによって逆転する）。グレゴールに未知の糧への道をさし示したかのように思われた音楽は、妹の弾くバイオリンだった。グレゴールは元来音楽を好まなかったのだから、彼を感動させたのは音楽それ自体の魅力ではなかったと思われる。此処でも音楽は聞く者を鼓舞し、力づける役目をはたす。探究する犬は皆のもとへ走り帰ったが、グレゴールは妹への執着を行動に移して、妹を独占するべく人間達に向かっていく。勿論それは失敗に終わるのだが。

扨、話者は猟犬の歌を体験した後、食物の研究ばかりでなく音楽の研究にも手を拡げようとする。しかし物語が其処で途切れているので、我々は話者の探究の内容は知ることができないのだが、我々自身でカフカの「音楽」について一考しておく必要があるだろう。

三、音楽

『或る犬の探究』には、音楽が三回登場する。音楽家の犬達の音楽と、糧を得る為の歌、そして猟犬の歌である。音楽家達の音楽については既に見た。糧を得る為の音楽とは、地の上に糧を呼び出す為に必要な、呪文と音楽と踊りという一連の行為のうちの一つである。話者の考えによればその行為は、学問に記してあるのとは異って本来上からやってくる糧をおりて来させる為の作業である。つまり歌は、呪文と踊りと共に、糧への呼びかけ、あるいは糧を与えてくれる者への呼びかけである。

音楽家の音楽をもう一度見てみよう。この音楽が尋常の音楽でないことは既に見た。それは、犬達のあらゆる身

ぶりや動き、また非常に遠くから聞こえてくる調べなどである。この音楽は話者の理解を越えている。話者はその未熟さ故に錯乱し、その力から逃れようとする。この音楽が呼びかけであったとすれば、話者はその呼びかけを理解し得なかった。話者の側からの質問も無視されて、双方の意志伝達は皆無だったと言える。この拒絶の体験によって話者は子供時代に訣別し、探究生活へと入る。音楽家の音楽は、結果的には話者を研究へ導いたことになる。

猟犬の歌はどうであったろうか。最初から音楽の予感はある。

「飢えで研ぎすまされた感覚で、私はこの犬に何ものかを見た、あるいは聞いたのだ。それは初めは芽生えたばかりであったが、次第に成長し、近づいてきた。私にはもうわかっていた。自分がどんな風にしたら立ち上がれるのか、今はまだ想像できなくとも、この犬は勿論私を追い払う力を持っているのだと。」（二七四―五）

やがて話者は猟犬が胸の奥深くから歌い始めるのに気づく。だが猟犬は、歌が聞こえていると話者が思うにも関わらず、「僕は歌うよ。じきに。だがまだだ。……用意していたまえ」（二七五）と言う。音楽は此処でも尋常の音楽ではない。音楽家の犬と同様に猟犬は歌っていない。話者は「彼から離れた旋律が、それ独自の法則に従って空気中を漂い……ただ私だけを、私の方だけをめざしている」（二七六）ような感に襲われる。さらにまた「最もいけないのは、この旋律がただ私の為だけに存在しているように思えたことだった。」（同前）猟犬の音楽は話者だけが感じるもの、つまり他の者が聞くことのできるような具体的な音楽ではない何か、をさす。「私だけをめざしている」この音楽は、話者への呼びかけである。そして話者はまさにこの時呼びかけを待っていたのだった。自から口に入ってくる糧は与えられなかったが、話者が孤独の淵に沈み、皆から見捨てられたと思い込んだ時に、呼びかけ

を携えて猟犬が彼のもとにやってきたのである。音楽家達に出会ったときには彼はまだ未熟であったから、その音楽を理解できず混乱するだけであったが、猟犬の音楽からはとにかくある種のメッセージを受取ったのである。『或る犬の探究』と同年に書かれた『城』に出てくる電話の歌声も同様であろう。Kは電話線を通じては城に達し得た。だが本来ならば強力な伝達手段であるべき電話が、此処では意志伝達には何の役にも立たない。耳に入ってくるのは「遠くの、非常に遠くの声から成る歌」[10]のように聞こえるざわめきである。しかし識者に言わせると「このざわめきと歌が唯一の正しくて信頼するに足るもの」[11]なのだ。村人もKもこのざわめきと歌からは何も聞きとることはできず、意志の疎通はない。だが人々は電話の向こうから聞こえてくるものを「歌」と呼び、「唯一の正しくて信頼できるもの」と考える。それは城の呼びかけであるか、あるいは呼びかけに対する人々の願望のあらわれなのであろう。Kが獲得できたものはそういうほとんど了解不能なよびかけだけである。Kはやってきた当初から城の拒絶にであい、城に到達する為のあらゆる試みと探究を尽くすにもかかわらず、城は彼に対して沈黙を守り続ける。

探究する犬も同様だったと言える。音楽家の犬達は「音楽」を伝えつつ、彼の問いには答えず沈黙している。話者は、問いかけに答えることを「我々の掟は常に無条件に要求している」（二三九）と言い、問いかけに答えない犬達の行為を罪と呼ぶ。だが彼等の行為に対する驚愕は話者が未熟な、世間を知らない子供だったからなのだ。話者が彼等との出会いから子供時代の幸福と訣別し、探究生活へ、大人の生活へと入ると周囲を沈黙が支配していることに気づく。話者が問い続けるのに、他の者達の「決定的な事柄に関する沈黙」（二四七）は固い。「それは私が子供の時、音楽家達に呼びかけても彼等が黙っていたあの当時と大して変わりはなかった」（同前）とは話者の

感懐だが、音楽家達との出会いが、拒絶の体験の始まりであり、話者はこの時以来拒絶を受け続けるのである。掟が守られるのは当然だと信じていた、つまり世界のあるべき姿が現実に存在すると信じていた話者に、子供っぽいと言える程に素朴な、そして同時に感性の鋭すぎる魂が見られる。周囲の沈黙に堪える手段は話者にとって問いかけである。

「我々〔話者とその同類〕は沈黙に押しつぶされている者、文字通り空気に飢えてそれを打ち破ろうとする者だ。他の者達は沈黙の中で居心地良げにみえる。成程それは、落ち着いて演奏しているように見えたが実際は非常に興奮していた音楽家達の場合のように、みせかけだけなのだが、この見せかけは強い。それに打ち勝とうとしても、誰の攻撃ものともされないのだ。」（二五五―六）

沈黙していない者もなかにはいる。総じてみれば、年寄りが沈黙しているのに比べ、若い者は問いたがる。空中犬は大変饒舌である。だがその饒舌は無意味だ。どちらも話者の仲間ではない。話者の孤独はさけ難いが、彼は孤独を大変怖れている。かつて断食を試みた時、断食を続ける誘惑に駆られたのも、一つにはその孤独と周囲の沈黙を怖れる気持があったからである。というのは「至る所に騒音がした。今までの人生で眠っていた世界が、私の断食によって眼覚めたように見えた。私はもう決して食べることができないような思いがした。そうしたら、解放されて喧しく音をたてている世界を再び黙らせてしまうに違いないから。私はそれには耐えられない。」（二七二）だが話者の孤独をいくらかでも救ってくれるそれは、音楽ではなく「騒音」でしかない。それ故猟犬によって「音楽」がもたらされると「森はその荘厳さに押し黙ってしまい」（二七六）断食の誘惑は去るのである。音楽とはすなわち沈

黙の中にもたらされた呼びかけである。[12] それはたいていの場合理解し難いもので、[13] それ故かすかな希望はますますかすかなものとなるが、それでもなおある種の甘美さは保ち続けて、音楽と名づけられるのである。

「音楽」はいずれも、何か不可解なものであった。カフカにあっては、最後の希望までもが元来伝達能力のない音楽であって、しかもその上に不可解さがつけ加わり、ますます何かを聞きとることは困難なものとなる。カフカの人物達はたいていが意志伝達能力を欠いていることを思い出そう。グレゴールは変身によって言葉を失なった。Kは、ヨーゼフ・Kは、田舎医者は、ゲオルク・ベンデマンは、相手の言葉を真の意味で聞きとることができない。だから彼等の周りであんなに不可解に世界が回転するのである。それは、カフカには真の意味で言葉をかわしあうことが不可能に思えたからである。探究を続ける犬は、自分が何か間違いを犯したに違いない、と思おうとする。

「私がそんな間違いを犯していなくて、それにも関わらず、長い生涯をかけた真面目な仕事によって望むものに到達できなかったとしたら、私の望むものは不可能だということになり、完全な絶望が生ずる」（二五〇）からである。何処かに間違いがあるに違いない、と思わずにはいられない、いたましい程に無垢な心をカフカは持っていたのだった。我々には、この世界の不可解さに悲しげに眼を見張っているカフカの顔が見える。カフカが芸術家だった。その著作は、禁欲の所産であり、カフカの生きる試みなのであった。

テキスト

Franz Kafka: *Beschreibung eines Kampfes. Novellen, Skizzen, Aphorismen aus dem Nachlaß.* In: *Gesammelte Schriften.* Hg. von Max Brod. New York: Schocken 1946 (Zweite Ausgabe). Bd. V.

テキストからの引用のページは本文中（　）で示した。カフカの他の作品からの引用は*Gesammelte Werke* in Einzelbänden. Hg. von Max Brod. Lizenzausgabe von Schocken Books New York. Frankfurt am Main: S. Fischer 1950ff. により、注に入れて*Werke*と略す。引用中の圏点は引用者による。

注

（1）*Werke. Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß.* Frankfurt 1953, S. 334f. 成立時期に関してはMalcolm Pasley und Klaus Wagenbach: *Datierung sämtlicher Texte Franz Kafkas.* In: *Kafka-Symposion.* München 1969 (dtv sonderreihe, 77), S. 52. 以下カフカの作品の成立時期は全てこの資料によっている。

（2）カフカの造語によるこの名は、イディッシュ語（ユダヤ系ドイツ語）で、詐欺師、ほら吹きの意を持つLuftmenschに由来する、とH・ポリツァーは指摘している。カフカの言葉の使い方はしかし、むしろLuftに重点を置いている。Vgl. Heinz Politzer: *Franz Kafka, der Künstler.* Gütersloh 1965, S. 452.

（3）猟犬に女性のイメージが与えられていることはカフカの手紙によっても後付けられる。それには、自分を森の獣になぞらえて恋人ミレナとの出会いを描いた箇所があるが、この箇処は多くの点で猟犬の話と一致しており、猟犬とミレナの間に強い連想が働いていると考えられる。Vgl. *Werke. Briefe an Milena.* Hg. von Willy Haas. Frankfurt 1952, S. 223f.

（4）*Werke. Der Prozeß. Roman.* Frankfurt 1965, S. 272.

(5) *Werke. Das Schloß. Roman.* Frankfurt 1967, S. 345.

(6) *Werke. Tagebücher 1910-1923.* Frankfurt 1951, S. 229.

(7) *Werke. Briefe 1902-1924.* Frankfurt 1966, S. 295.

(8) *Werke. Erzählungen.* Frankfurt 1952, S. 128.

(9) *Ebd.* S. 130.

(10) *Das Schloß.* S. 32.

(11) *Ebd.* S. 107.

(12) H・ビンダーはカフカの音楽を、伝記的には全てユダヤ的なものと結びつけて考えている。音楽家の犬達はイディッシュ語の劇団の俳優達であり、音楽の研究はヘブライ語の勉強であり、音楽はユダヤ的本質の刻印である等。本論における音楽の分析は、民族的なものを考慮に入れても該当し得るだろう。Vgl. Hartmut Binder: *Kafkas Hebräischstudien. Ein biographisch-interpretatorischer Versuch.* In: Jahrbuch der Schiller-Gesellschaft 1967, S. 527-556. ならびに Derselbe: *Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen.* München 1975, S. 268 ff., 285, 288f.

(13) 音楽がわけのわからないものであるのは、カフカの非音楽性もあずかっていると考えられる。Vgl. *Tagebücher.* S. 189f.

（文学部助手）

SUMMARY

Der Künstler als Asket
—Über Kafkas »Forschungen eines Hundes«—

Teruko ISHIMITSU

Aus den »Forschungen eines Hundes« kann man einige Motive herausarbeiten, mit denen sich Kafka in seinen letzten Jahren besonders viel beschäftigt hat, nämlich das Künstlertum, das Hungern und andere damit im Zusammenhang stehende Motive. Das Hungern steht für Askesen auf allen Gebieten des Lebens, d. h. es ist bei Kafka ein bedeutendes Mittel des Künstlers als eines Asketen oder eines Forschenden. Der Autor hat den Künstler in den Gestalten der Musikerhunde und der Lufthunde ironisch dargestellt, die negative Seiten des Künstlers zeigen, z. B. das Schamlose, das Unsinnige usw. Dagegen verkörpern die Jäger-Gestalt und der Ich-Erzähler den Künstler als einen Forschenden. Der Ich-Erzähler forscht, um das irdische Leben ertragen zu können, und seine Forschungen über die Nahrung, die ja allem Leben nötig ist, deren Quelle aber hier niemand genau kennt, werden dazu angestellt, in das Wesen der Hunde, also der Menschen einzudringen. Das Fasten, die Verweigerung der Nahrung als das letzte Mittel seiner Forschung, hält er für die höchste Leistung, und nur durch sie ist das Höchste erreichbar. Dieses Höchste, das die Helden Kafkas niemals erreichen können, obwohl sie immer danach streben, soll hier in diesem Werk durch den Akt der Askese gewonnen werden. Denn die Nahrung kommt von oben, demanch wird das Höchste als eine Gnade gegeben. Daß Kafka die Anrufung eines solchen Asketen in der Einsamkeit Musik nennt, muß noch hinzugefügt werden.